

第11回（平成27年度）

美の里づくりコンクール表彰対象事例一覧

【農林水産大臣賞】 1点

たけはら
竹原農地・水・環境保全会（げろし岐阜県下呂市）

【農村振興局長賞】 1点

特定非営利活動法人シナイモツゴさと かい郷の会（おおさきし宮城県大崎市）

【美の里づくりコンクール審査会特別賞】 5点

おおぬま
大沼グリーン・ツーリズム推進協議会（ななえちよう北海道七飯町）

つしま
対馬地区環境保全協議会（みかわまち山形県三川町）

特定非営利活動法人せんがまちたなだ くらぶ棚田倶楽部（静岡県

きくがわし
菊川市）

たけとりものがたり
竹取物語実行委員会（さいじょうし愛媛県西条市）

よねおく
米奥小学校学校運営協議会（しまんとちよう高知県四万十町）

平成 27 年度（第 11 回）美の里づくりコンクール

受賞地区の概要

農林水産大臣賞

岐阜県 下呂市 竹原農地・水・環境保全会

いやしの里竹原「美しい田園・頑張る農村」

平成 19 年 4 月から御厩野ふるさと会、野尻花の里済美隊、宮地ふるさと環境保全会、ふるさと乗政を守る会の 4 組織は、「農地・水・環境保全向上対策事業」の取り組みをきっかけとして、今こそ郷土の環境を見直し後世に残すことを地域住民主体の活動で行う必要性を認識し、活動の中心となる組織づくりを話し合った。そして、組織間の情報共有、農村の環境保全、美しい里、美しい田園づくりの充実を図るため、地区の全住民が会員となった「竹原農地・水・環境保全会」を結成し、「美しい田園・頑張る農村」を目指している。

「竹原農地・水・環境保全かわら版」の年 4 回の発行、「竹原見どころマップ」の年 1 回の発行等による PR やロコミで、都市住民との交流活動が盛んになり、竹原を訪れる人が増加した。また大阪府大阪市の中学校の修学旅行を受入れ、農業体験、地元朝市での販売体験を実施し好評を得ている。

地域住民の情報共有と地域の見どころ再発見の参考とするため、きれいな里の風景や農村文化を見学するウォーキングをこれまでに 14 回開催し、都市住民のリピーター参加もあり、人気の行事として定着している。また、棚田や休耕地を利活用した取り組みとして、ソバ畑、ハスの花、ひまわり園、ショウブ園、アジサイ園等を整備し、世代交流の場として地域ごとにふれあい農園を開設し、トウモロコシ等の植付けから収穫までの体験作業を住民自らが参加して行い、祖父母からひ孫の 4 世代間の交流が活発になった。



竹原地区の秋の風景



春の農村ウォーキング

農林水産省農村振興局長賞

宮城県 大崎市 特定非営利活動法人シナイモツゴ郷の会

全国モデルを目指す地域ぐるみの自然再生活動

～みんなで守ろう中山間地の豊かな自然～

「シナイモツゴ」は1916年に大崎市鹿島台の品井沼で初めて採取され、その名は発見地の品井沼に由来し宮城県の地名が付いた唯一の魚で、1930年代まで東北地方ではフナ、ドジョウと同様に普通に生息していたが、それ以降は正式な採捕記録も無く宮城県では全滅したと考えられていた。その後1993年にその生息が確認されたシナイモツゴを始めとする旧品井沼の自然を守るための保護の重要性を地域の方々に理解してもらおうとの目的から、2002年に任意の会を立ちあげ、その後2004年に更に先駆的な活動を広範囲に展開するためにNPO法人化した。

NPO、小学校、農業団体、大学、大崎市と連携した地域ぐるみの活動により周辺ため池からブラックバスを一掃し、シナイモツゴやゼニタナゴの生息するため池を増やし下流の小川でメダカやフナが増加するなど豊かな自然を再生した。

さらには、「シナイモツゴ郷の米」認証制度を確立し環境保全に取り組む農業者を支援する活動、小学校を対象とした「シナイモツゴ里親制度」と生き物観察会などによる環境教育活動、在来ヒシの活用やザリガニ魚醤の開発による地域おこし、成果の公表・普及を目的としたシンポジウムの開催（2004年から毎年）と出版など、シナイモツゴの保護を発端として、地域での幅広い活動へと展開している。



シナイモツゴの放流会



シナイモツゴ郷の米と稲刈り体験

美の里づくり審査会特別賞

北海道 七飯町 大沼グリーン・ツーリズム推進協議会

北海道開拓史から受け継がれる農林水産業と美しい景観づくり

七飯町大沼地区は、道南にあり函館市から北へ 16km の距離にあり、秀峰・渡島駒ヶ岳と新日本百景に選ばれた風光明媚な大沼国定公園を有し、江戸末期の函館開港以来、西洋農業や文化を取り入れ、観光と農業、酪農、毛皮加工業を基幹産業とした人口約 2,800 人の地域である。また七飯町南部の地域は温暖な気候を活かし、りんご等の果樹栽培や農業が盛んな地域として同じく歴史は古く、道南圏最大の農産物生産地域である。こうした地域にある農村資源を新たな地域づくりの起爆剤として、滞在型体験交流活動を行うグリーン・ツーリズムを通じて、地域住民、農業者、NPO、企業等が連携した農村活性化の取り組みを行っている。

休耕農地や放置山林の景観を取り戻すため、馬搬技術を取り入れた間伐処理や、放牧による下草処理を積極的に行ってきた。こうして作り上げた景観や農村環境を活用し、子どもを対象にした滞在型体験交流活動を地域と連携し定期的に行い食育等の普及に努めた。また、地域の人材ネットワークによる「田舎暮らし講座」を開催し、地域の伝統技術、文化の掘り起こしに農村体験プログラムを作成した。

そして、こうした取り組みの受入体制の整備や広域連携の展開等を目的に、農林水産省の「食と地域の交流促進事業」を活用し、同事業のモデル地域である松前町をはじめ、森町、鹿部町等と連携し各地域の農村資源、人材等の発掘を行いつつ活動の展開を行っている。



馬搬の伝統技術の継承



林業体験をする訪日外国人

美の里づくり 審査会特別賞

山形県 三川町 対馬地区環境保全協議会

生きものの力を借りて農業を守る

対馬地区では、大麦や菜種が栽培されており、その大麦や菜種の収穫後に農地に水を張って農地を管理する「なつみずたんぼ」という取組を実施している。

なつみずたんぼの効果は、農業面では雑草を抑え、地力を回復させ連作障害を防ぐほか、生物多様性の面でもたくさんの種類の野鳥や水生生物の生息地となることが近年の取組からわかってきた。

本協議会では、このなつみずたんぼに着目し、なつみずたんぼを活用しての農村環境や景観及び生物の保全活動、並びに地域住民や都市住民との交流事業を実施している。

さらに当地区では、有機栽培米への取り組みが盛んで、作るだけではなく有機栽培米を地元小学校の給食に提供したり、子ども達と一緒になつみずたんぼの生き物調査を実施するなど、環境に配慮した農業を普及している。

このような効果が見られたことから、本協議会ではパンフレットの作成や東京でのシンポジウムでの事例発表の実施など、活動の普及や農業と生物多様性についての啓発活動を精力的に行っている。



水を張ったたんぼと背景に広がる月山



たんぼで子どもたちと生きもの調査

美の里づくり審査会特別賞

静岡県 菊川市 特定非営利活動法人せんがまち棚田倶楽部

茶草場と棚田の里「せんがまち」

戦国時代末期より開田が始まり、ピーク時には3千枚、500俵余の米を生産した「せんがまち」は、昭和50年代に入り農家の高齢化・減反政策・生産効率の悪さにより激減した。棚田の美しい風景は私達の祖先が残した貴重な財産だと気付いた時、既に9割の棚田は葦原と化し、子供の頃遊んだ昔の面影は失われていた。平成6年、日本の原風景である「棚田」を守り子供達に伝えていこうと、地元農家を中心となり、「千枚田を考える会」が発足した。以来棚田の復田に取り組み、平成22年に「NPO法人せんがまち棚田倶楽部」を設立した。法人化と共にオーナー制度を取入れ、「せんがまち」の棚田保全活動と貴重な生態系の保護を行っている。世界農業遺産「静岡の茶草場農法」に認定された棚田周辺の茶草場（採草地）は、茶農家の高齢化と茶価の下落により荒廃茶草場を生みだしたが、再生整備に取り組み、一部はソバ畑に整備され、都市住民にソバの栽培と蕎麦打ち体験の場を提供している。

また、広報活動にも力を入れ、棚田の美しさを多くの子供達に知ってもらい、未来に残す活動を実践している。現在の会員数は21名、地元農家を中心に、会社員や静岡大学棚田研究会OBなどの若手が加入し、新たな可能性を見出している。



棚田オーナーによる田植え



常葉菊川中学生による田起こし体験

美の里づくり審査会特別賞

愛媛県 西条市 竹取物語実行委員会

豊かな森林をつくり、水源涵養で水を守り、災害に強いまちづくりと人づくり、
そして地域づくり

西条市大保木地区は市中心部から南に車で約30分、西日本最高峰の石鎚山（1982m）の麓に位置し、険しい山々や地区の中心を流れる加茂川等の豊かな自然に恵まれ、一年を通して美しい景色を見ることができる地域である。かつては林業が盛んで、昭和31年の大保木村と西条市の合併時には、3,600人程度の人々が暮らしていたが、現在は182人、平均年齢は70歳となり、人口減少と高齢化が大きな課題となっている。また、かつての杉林は竹の侵食により放置竹林化し、大雨時にたびたび災害が発生している。

竹取物語実行委員会は、「豊かな森林をつくり、水源涵養で水を守り、災害に強いまちづくりと人づくり、そして地域づくり」の志に共感する各種団体の有志と地域住民の協働により、冬の竹の伐採適期に合わせて、竹の伐採活動等を行っている。

竹取物語とは、狭義には、市内外のボランティア約200名が集まり、放置竹林の伐採活動を行い、地元住民がイノシシの料理などでおもてなしを行うイベントであるが、広義には、大保木地区の竹林伐採を核として市内各地で展開されている環境保全、森林の育成、市民の交流など、地域活性化・地方創生を願う一連の活動である。



「竹取物語」の伐採活動状況



竹の腰高伐採の状況

美の里づくり審査会特別賞

高知県 四万十町 米奥小学校学校運営協議会

地域とともに四万十川と学校林を活かす取り組みを！

米奥地区は、四万十川上流松葉川の両岸に開けた地域で、戸数は 280 戸ほど、そのうち本校に児童が通学している家庭は 10 戸強、児童数はこのところ 20 名前後で推移している。

米奥小学校は、四万十川流域の中でも最も川に接近した学校で、学校林も数箇所学校に近接してあるなど豊かな自然に恵まれている。保護者・地域は学校教育に対して極めて協力的であり、様々な学校の取り組みに対して地域を挙げて支援している。

学校運営協議会は『小さくてもきらりと光る学校』を目指して学校を存続発展させること、学校と地域がともに協働した活動を展開していくことで地域の活性化を図ることを目的として結成した。地域挙げて取り組む『米奥沈下橋夏祭り』を 30 年ぶりに復活させ、地域の地踊りや子ども相撲は地域の絆を感じさせ、間近にある二つの沈下橋を間伐材の炎がまるで迎え火のように照らし、老若男女が集う。『四万十川広葉樹植林プロジェクト』は四万十川の清流を取り戻す取り組みで、川の恵みは広葉樹が用意することを学んだ子どもたちは、高知大学の学生とも協働して樹木名札設置や植林に取り組んできた。また、間伐材を活用したツリーハウスは 3 代目の秘密基地になっている。



米奥小学校周辺の全景



学校林での植林活動